

1 概況

(1) 気象概況

－気象庁資料からみた、平成26年の月別の気象概況は、以下のとおりである－

1 月 全国的に中旬は低温、下旬は高温となり、降雪量は北日本と山陰の一部を除き平年並か少ないところが多かった。

上旬は、北日本日本海側で気圧の谷の影響を受けやすく曇りや雪の日が多かった。

中旬は、冬型の気圧配置が強まり、全国的に寒気の影響が大きく気温は平年を下回った。日本海側では北日本を中心に所々で大雪となる日があった一方、太平洋側では晴れた日が多かった。

下旬は、冬型の気圧配置は弱く、南からの暖かい空気が流れ込み気温が平年を大きく上回る日があるなど、全国的に気温が平年を上回った日が多かった。また、東日本から沖縄・奄美にかけては移動性高気圧に覆われて晴れた日があった。

北日本日本海側では、気圧の谷や冬型の気圧配置の影響を受けやすかったことから月降水量はかなり多く、月間日照時間が少なかった。一方、東・西日本と沖縄・奄美では、太平洋側では中旬に冬型の気圧配置が強まり晴れた日が多かったこと、下旬は日本海側も含め移動性高気圧に覆われる日があったことから月間日照時間がかなり多くなった。

2 月 北日本から西日本にかけて気温の低い日が多かった。太平洋側では大雪に2度見舞われ、関東甲信地方を中心に記録的な大雪となった。一方、日本海側の降雪量は少なかった。

上旬半ばから下旬はじめにかけては、大陸の高気圧が下層の寒気を伴って日本海に張り出し、気温の低い日が多かった。

また、低気圧が周期的に日本の南を通過したため、西日本や北・東日本太平洋側でもたびたび雪や雨となった。7日から8日にかけてと14日から16日にかけては、低気圧が日本の南岸を発達しながら通過したこと、広い範囲で大雪や大雨となり、特に14日から16日にかけては関東甲信地方を中心に過去の最深積雪の記録を大幅に上回る記録的な大雪となった。東日本太平洋側では、降雪の深さの月合計が平年の601%となり、2月としては統計を開始した1961年以降最も多い値を更新した。一方、日本海側では曇りや雪の日が多かったが、上空に強い寒気が流れ込むことはほとんどなかったことから、日本海側の降雪の深さ月合計は少なかった。

3 月 月の前半は全国的に低温となり、月の終わり頃は北日本から西日本にかけて高温となった。北日本から西日本にかけて月降水量が多かった。

月を通して日本付近を低気圧と高気圧が交互に通り、低気圧の通過後は北日本を中心に冬型の気圧配置となるなど、全国的に天気は数日の周期で変わった。

月の前半は、日本付近に強い寒気が流れ込んだため全国的に低温となった。特に上旬の後半から中旬のはじめにかけての気温は全国的に平年を大きく下回り、東・西日本日本海側の山沿いや北日本では大雪となった所があった。

月の後半は、日本付近を通過する低気圧がたびたび発達したため、北日本から西日本の所々で大雨や北日本太平洋側を中心に大雪となるなど大荒れの天気となった。特に、東日本日本海側の月降水量の平年比は168%で、3月としては1946年以降で最も多くなった。また、13日には、屋久島（鹿児島県）で日降水量が334.5mmとなり3月としては歴代全国1位を更新した。

月の終わり頃は、南から暖かい空気が流れ込んだため、北日本から西日本にかけての気温は平年を大幅に上回った。

4 月 全国的に日照時間は平年を上回り、降水量は平年を下回った。気温は北日本から西日本にかけて平年並で沖縄・奄美では低温となった。

月を通して、全国的に高気圧に覆われて晴れる日が多かった。4日から5日は低気圧が急速に発達しながら三陸沖からオホーツク海に進み、北日本太平洋側では大雪や大雨となった所があった。この低気圧の通過後は日本付近に強い寒気が流れ込んだため、全国的に気温は平年を下回った。その後、気温は中旬にかけて北日本を中心に平年を下回る日が多かったが、下旬には南からの暖かい空気が流れ込み、北日本を中心に顕著な高温となった。

また、28日から30日は、低気圧や前線に向かって南から湿った空気が流れ込み、東・西日本太平洋側を中心に大雨となり、局地的には降り始めからの総降水量が300ミリを超えた所があった。月間日照時間は全国的に平年を上回り、北日本と東日本日本海側ではかなり多かった。北日本日本海側では平年の141%、北日本太平洋側では平年の140%、東日本日本海側では平年の130%で、4月としては統計を開始した1946年以降で最も多くなった。月間降水量は全国的に平年を下回り、北日本日本海側と沖縄・奄美でかなり少なかった。

5月 気温は、北・東日本で高かった。東・西日本では、降水量が少なく、日照時間がかなり多かった一方で、沖縄・奄美では、降水量が多く、日照時間がかなり少なかった。

月を通して日本付近を低気圧と高気圧が交互に通る、北日本から西日本にかけては、天気は数日の周期で変わったが、東・西日本を中心に高気圧に覆われて晴れる日が多かった。このため、月降水量は少なく、月間日照時間は、東・西日本ではかなり多くなった。東日本太平洋側、西日本太平洋側、西日本日本海側の月間日照時間は、それぞれ平年の137%、130%、135%と、5月としては統計を開始した1946年以降最も多い値となった。一方、沖縄・奄美は、低気圧や前線の影響で曇りや雨の日が多かった。南から湿った気流が入りやすく前線の活動が活発だったことから、月降水量が多く、月間日照時間がかなり少なくなった。

気温は、上旬前半、中旬前半、下旬後半に南から暖かい空気が入り、北日本を中心に平年を大幅に上回ったため、北・東日本では月平均気温が高かった。特に下旬後半は、最高気温が30℃以上の真夏日となり、各地で5月の気温の最も高い値を更新した。

6月 北日本では気温がかなり高かった。降水量は、北日本と東日本太平洋側で多く、東・西日本日本海側では少なかった。日照時間は、東日本で多く、西日本と沖縄・奄美で少なかった。

月のはじめは高気圧が本州付近を東進し、その後、千島の東の高気圧が北日本を覆った。晴れて強い日射があったことに加えて、高気圧が優勢で大規模な下降気流に覆われたこと、中国大陆から高温な空気が流れ込んできたことから、北日本を中心に気温が平年を大幅に上回った。一方、低気圧が2日から8日にかけて本州南岸をゆっくりと東進し、湿った空気の流入した太平洋側では、関東地方を中心に記録的な大雨となった所があった。

中旬は、北日本と西日本では気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多くなり、北日本では大雨となる日もあったが、東日本では晴れの日が多かった。

下旬は、北・東日本では高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、上空の強い寒気の影響で雷雨となる日もあった。西日本では、旬の前半は晴れたが、旬の後半は梅雨前線の影響で曇りや雨となった。一方、旬の後半は日本の南で太平洋高気圧が強まり、沖縄地方は26日頃に梅雨明けした。

北日本では、上旬と下旬を中心に高気圧に覆われ晴れたため気温が高く、月平均気温はかなり高くなった。北日本と東日本太平洋側では、上旬や中旬に大雨となり、月降水量が多かった。東日本では、上旬に大雨となった関東甲信地方では月降水量も多かったが、それ以外の地方では梅雨前線や気圧の谷の影響が小さく月降水量は少なかった。また、西日本では気圧の谷の影響を受けやすく月間日照時間は少なかったものの、梅雨前線が奄美付近に離れて停滞することが多く、まとまった雨となりにくかった。このため、月降水量は、西日本日本海側と西日本太平洋側の一部で少なかった。特に、近畿地方の月降水量は平年の39%と6月としては最も少ない値となった（統計開始は1946年）。沖縄・奄美では、月を通して梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多く、月間日照時間が少なかった。

7月 北日本で気温がかなり高く、北日本と東日本太平洋側で日照時間が多かった。台風第8号と梅雨前線によって大雨となったところがあった。

上旬は、5日頃にかけて梅雨前線が本州の南海上に停滞し、6日以降は台風第8号が沖縄の南から北上して、8日に沖縄本島と宮古島の間を通過した。その後、台風は進路を東に変え、10日に鹿児島県に上陸して本州南岸を東進し、11日に関東の東で温帯低気圧に変わった。この影響で、沖縄本島地方では記録的な大雨となったほか、台風周辺の湿った南風と梅雨前線の影響で、北日本から西日本にかけても局地的に大雨となり、長野県で土石流による被害が発生するなど、各地で土砂災害や浸水害等が発生した。

中旬には日本の南で太平洋高気圧の勢力が次第に強まり、梅雨前線は日本海沿岸まで北上した。このため、東・西日本太平洋側や沖縄・奄美では太平洋高気圧に覆われて晴れる日が多く、東・西日本日本海側では梅雨前線の影響で曇りや雨となる日が多かったが、19日から20日にかけては、上空の寒気の影響により、広い範囲で雷雨となり、局地的に大雨となったところがあった。一方、北日本では、梅雨前線の影響は小さく、晴れた日が多かった。

下旬には梅雨前線は北日本まで北上した。北日本では北海道を中心に大雨となった日があったが、東・西日本や沖縄・奄美では高気圧に覆われて晴れる日が多く、旬の中頃は猛暑日となったところが多かった。

月全体でみると、北日本と東日本太平洋側では、梅雨前線の影響が小さく、高気圧に覆われて晴れる日が多かったため、月間日照時間が多く、北日本太平洋側ではかなり多かった。また、北日本では南からの暖かい空気が流れ込みやすく、月を通して気温が平年を上回ったため、月平均気温がかなり高くなった。

8月 東日本及び西日本の日照時間はかなり少なく、西日本では低温となった。台風第12号及び台風第11号が相次いで日本に接近、または上陸するとともに、前線が日本付近に停滞したため、各地で大雨となった。

太平洋高気圧は、日本の南東海上では強かったが、本州付近への張り出しは弱く、日本付近は湿った気流の影響を受けやすかった。このため、東日本、西日本の日照時間はかなり少なく、西日本太平洋側で平年比54%となり、1946年の統計開始以来8月としては最も少なかった。

また、降水量は北日本から西日本にかけて多く、西日本太平洋側の降水量は平年比301%となり、1946年の統計開始以来8月としては最も多い記録を更新した。

上旬は、台風第12号、第11号の周辺の風と太平洋高気圧縁辺の風の影響で、日本付近には南からの暖かく湿った空気の流れ込みが続いた。台風第12号の影響で、四国地方の太平洋側では8月1日から5日までの総降水量が多い所で1,000ミリを超えた。また、10日に四国地方に上陸した台風第11号の影響で、沖縄・奄美と西日本で暴風雨となり、四国地方から東海地方にかけて、8月7日から11日までの総降水量が500ミリから1,000ミリとなるなど全国各地で大雨となった。

中旬から下旬中頃にかけては、前線が日本海沿岸付近に停滞するとともに、暖かく湿った空気が流れ込み、北日本から西日本の広い範囲で大気の状態が非常に不安定となったため、大雨となったところがあった。特に16日から17日にかけては、近畿地方、北陸地方、東海地方の所々で大雨が発生し、さらに、19日夜から20日明け方にかけては、広島県広島市で集中豪雨となり大規模な土砂災害が発生した。これら7月30日からの大雨について、気象庁は「平成26年8月豪雨」と命名した。

気温は、西日本では太平洋高気圧に覆われる日が少なく、曇りや雨の日が多かったため、8月としては2009年以来5年ぶりに低温となった。一方、暖かい空気に覆われることが多かった沖縄・奄美では高温となった。北日本では、8月上旬に高温となったが、その後は寒気の影響を受ける時期があり平年並となった。また、東日本では、平年並みとなったが、寒暖の変動が大きく、上旬は猛暑日となるところが多かったが、下旬の気温はかなり低くなった。

9月 9月としては、東日本で5年ぶり、西日本で8年ぶりの低温となった一方で、沖縄・奄美は記録的高温となった。全国的に、少雨・多照の地方が多かったが、北海道で記録的な大雨が降った。

北日本から西日本にかけては、大陸からの冷たい空気を伴った移動性高気圧に覆われることが多かった。秋雨前線は、西日本の南海上に停滞したものの、本州付近ではその活動は弱かった。一方、沖縄地方は勢力の強い太平洋高気圧に覆われた状態が続いた。このため、東日本から西日本にかけては気温が低く、東日本は2009年以来5年ぶり、西日本では2006年以来8年ぶりの低温となった。一方、沖縄・奄美では月平均気温が平年差+1.3℃と著しい高温となり、1946年の統計開始以来、9月としては最も高い記録を更新した。また、前線に近かった九州と四国を除いては、ほとんどの地方で日照時間が多く、降水量が少なかった。特に、北・東日本と沖縄・奄美の日照時間はかなり多く、北日本日本海側の月間日照時間は平年比122%と、1946年の統計開始以来、9月として最も多い記録を更新した。一方、九州北部地方と九州南部では、前線の影響を受け、日照時間が少なくなった。

上旬は、本州南岸に前線が停滞することが多く、東・西日本太平洋側では曇りや雨の日が多かった。

一方、北日本と東日本日本海側では天気は数日の周期で変わったが、移動性高気圧に覆われて晴れた日が多かった。また、沖縄地方では熱帯低気圧（7日に台風第14号に発達）の影響を受けた6日を除き、太平洋高気圧に覆われて晴れて暑い日が続いた。

中旬は、沖縄地方では引き続き太平洋高気圧に覆われて晴れて暑い日が続いた。北日本では上空に寒気を伴った低気圧の影響で北海道を中心に曇りや雨の日が、西日本では前線の影響で曇りの日が見られ、天気は数日の周期で変わったが、東日本と東北地方では移動性高気圧に覆われる日が多かった。また、上空に寒気を伴った低気圧がゆっくりと北日本を通過し、下層に湿った空気が流れ込んだために、北海道の一部では11日に記録的な大雨となり、大雨特別警報が発表された地方があった。

下旬は、本州の南海上には前線が停滞し、九州では前半を中心に曇りや雨の日が多かったが、西日本から北日本にかけては数日の周期で天気は変わったものの移動性高気圧に覆われて晴れる日が多かった。また、沖縄・奄美では太平洋高気圧に覆われて晴れて暑い日が多かった。

10月 相次いで上陸した2つの台風の影響で、ほぼ全国的に多雨となった。北日本と東日本日本海側で日照時間が多く、北日本で10月としては11年ぶりの低温となった。

月を通して全国的に天気は数日の周期で変化したものの、相次いで上陸した台風第18号と第19号の影響で、ほぼ全国的に月降水量が多く、東日本ではかなり多かった。台風第18号は、4日から5日にかけて日本の南を北上し、6日には静岡県に上陸して日本の東へ進み、東北地方から九州地方の太平洋側の広い範囲と奄美地方、大東島地方で大雨となった。台風第19号は、11日から12日にかけて沖縄・奄美を北上した後、13日には鹿児島県に上陸、14日にかけて四国と本州を北東へ進み、全国的に大雨となった。

北日本と東日本日本海側では、大陸から移動してきた高気圧に覆われることが多く、月間日照時間が多かった。一方、西日本太平洋側と沖縄・奄美では、上旬は台風や湿った気流の影響で日照時間がかなり少ない、または少なかったものの、中旬以降は移動性高気圧に覆われる日もあり、月間日照時間は平年並となった。

北海道地方と沖縄県の八重山地方では、台風や低気圧の影響が小さかったため月降水量が少なかった。特に、八重山地方では、7月以降、少雨の状態が続いている。

また、偏西風が日本の東で南へ蛇行して、北日本では寒気がしばしば流れ込み、10月としては2003年以来11年ぶりの低温となった。

11月 全国的に高温であった。北日本日本海側で少雨、多照となった。中旬に強い寒気が南下した。低気圧と高気圧が交互に通過し、全国的に天気は数日の周期で変わった。

上旬は、東・西日本太平洋側では気圧の谷や前線の影響で曇りや雨の日が多く、日照時間が少なかった。また、3日から4日にかけては日本海の低気圧が発達しながらオホーツク海に進み、北日本を中心に大荒れの天気となった。

中旬は冬型の気圧配置の日が多く、日本海側では曇りや雨または雪、太平洋側では晴れの日が多くなった。特に13日から15日にかけては冬型の気圧配置が強まり、日本付近に強い寒気が流れ込んだため、北日本と東日本日本海側では大荒れの天気となり、札幌では15日に25cmの最深積雪となるなど、北日本では局地的に大雪となった所があった。また、東・西日本と沖縄・奄美では旬平均気温が低くなった。

下旬の前半は移動性高気圧に覆われ全国的に晴れた日が多かった。後半は低気圧や前線が短い周期で日本付近を通過したため、東・西日本や沖縄・奄美では雨の降った日が多く、西日本日本海側では旬降水量がかなり多くなった。特に、25日から26日にかけては低気圧が本州南岸を東進したため東・西日本を中心にまとまった雨となり、27日から28日にかけては気圧の谷の影響で先島諸島では大雨となった。また、南からの暖かい空気が流れ込みやすかったため、全国的に気温がかなり高くなった。

月としては、中旬を除き寒気の影響が弱かったため、全国的に気温が高く、北日本日本海側では降水量がかなり少なく、日照時間がかなり多かった。

12月 全国的に低温であった。ほぼ全国的に降水量は多く、日照時間は少なかった。日本海側を中心に降雪量は多かった。

低気圧が数日の周期で日本付近を通過した後、強い冬型の気圧配置となる日が多く、上旬の中頃、中旬の中頃から終わり頃、下旬の中頃などに日本付近に強い寒気が流れ込んだ。このため、月平均気温は全国的に低く、北・東・西日本日本海側では、曇りや雪または雨の日が多くなり、沖縄・奄美でも曇りや雨の日が多かった。また、北・東・西日本太平洋側でも、晴れの日が続かず、数日の周期で天気が崩れ、大雪となった所もあった。

降水量は、沖縄・奄美を除いて全国的に多く、特に、北日本日本海側で平年比154%、東日本日本海側で平年比222%となり、12月としては統計を開始した1946年以降で最も多い記録を更新した。

日照時間は、東日本太平洋側を除いて全国的に少なく、北・東・西日本日本海側、沖縄・奄美ではかなり少なかった。月最深積雪は、北陸地方から東北地方で2mを超えた所があったほか、アメダスを含めた全国322の観測地点のうち北・東日本の14地点で、12月としての月最深積雪の最大値を更新した。

なお、16日から18日にかけては、日本付近を通過した低気圧が北海道の東で発達し、非常に強い冬型の気圧配置となったため、北日本や東・西日本日本海側で大雪や暴風雪となったほか、17日朝から昼前にかけて根室地方の沿岸で、顕著な高潮が発生した。

表 1 梅雨入り・梅雨明けの状況（平成26年）

梅雨入り

地 域	本年	平年	前年
沖 縄	5 月 5 日頃	5 月 9 日頃	5 月10日頃
奄 美	5 月 5 日頃	5 月11日頃	5 月10日頃
九州南部	6 月 2 日頃	5 月31日頃	5 月27日頃
九州北部	6 月 2 日頃	6 月 5 日頃	5 月27日頃
四 国	6 月 2 日頃	6 月 5 日頃	5 月27日頃
中 国	6 月 2 日頃	6 月 7 日頃	5 月27日頃
近 畿	6 月 3 日頃	6 月 7 日頃	5 月27日頃
東 海	6 月 4 日頃	6 月 8 日頃	5 月28日頃
関東甲信	6 月 5 日頃	6 月 8 日頃	6 月10日頃
北 陸	6 月 5 日頃	6 月12日頃	6 月18日頃
東北南部	6 月 5 日頃	6 月12日頃	6 月15日頃
東北北部	6 月 6 日頃	6 月14日頃	6 月15日頃

注：気象庁資料による（以下の表において同じ。）。

梅雨明け

地 域	本年	平年	前年
沖 縄	6 月26日頃	6 月23日頃	6 月11日頃
奄 美	7 月 4 日頃	6 月29日頃	6 月29日頃
九州南部	7 月16日頃	7 月14日頃	7 月 8 日頃
九州北部	7 月20日頃	7 月19日頃	7 月 8 日頃
四 国	7 月20日頃	7 月18日頃	7 月 8 日頃
中 国	7 月20日頃	7 月21日頃	7 月 8 日頃
近 畿	7 月20日頃	7 月21日頃	7 月 8 日頃
東 海	7 月21日頃	7 月21日頃	7 月 7 日頃
関東甲信	7 月21日頃	7 月21日頃	7 月 6 日頃
北 陸	7 月21日頃	7 月24日頃	8 月 7 日頃
東北南部	7 月25日頃	7 月25日頃	8 月 7 日頃
東北北部	7 月25日頃	7 月28日頃	8 月10日頃

(2) 被害概況

平成26年は、2月上旬と中旬に太平洋側での広い範囲の大雪等があり、ビニールハウスの倒壊に伴う農作物の損傷等による198億円の被害が発生した。

平成26年の日本への台風の上陸数は、最近10年で最も多い4個（台風第8号、第11号、第18号及び第19号）となった。これらにより、浸水、冠水等による被害が発生した。

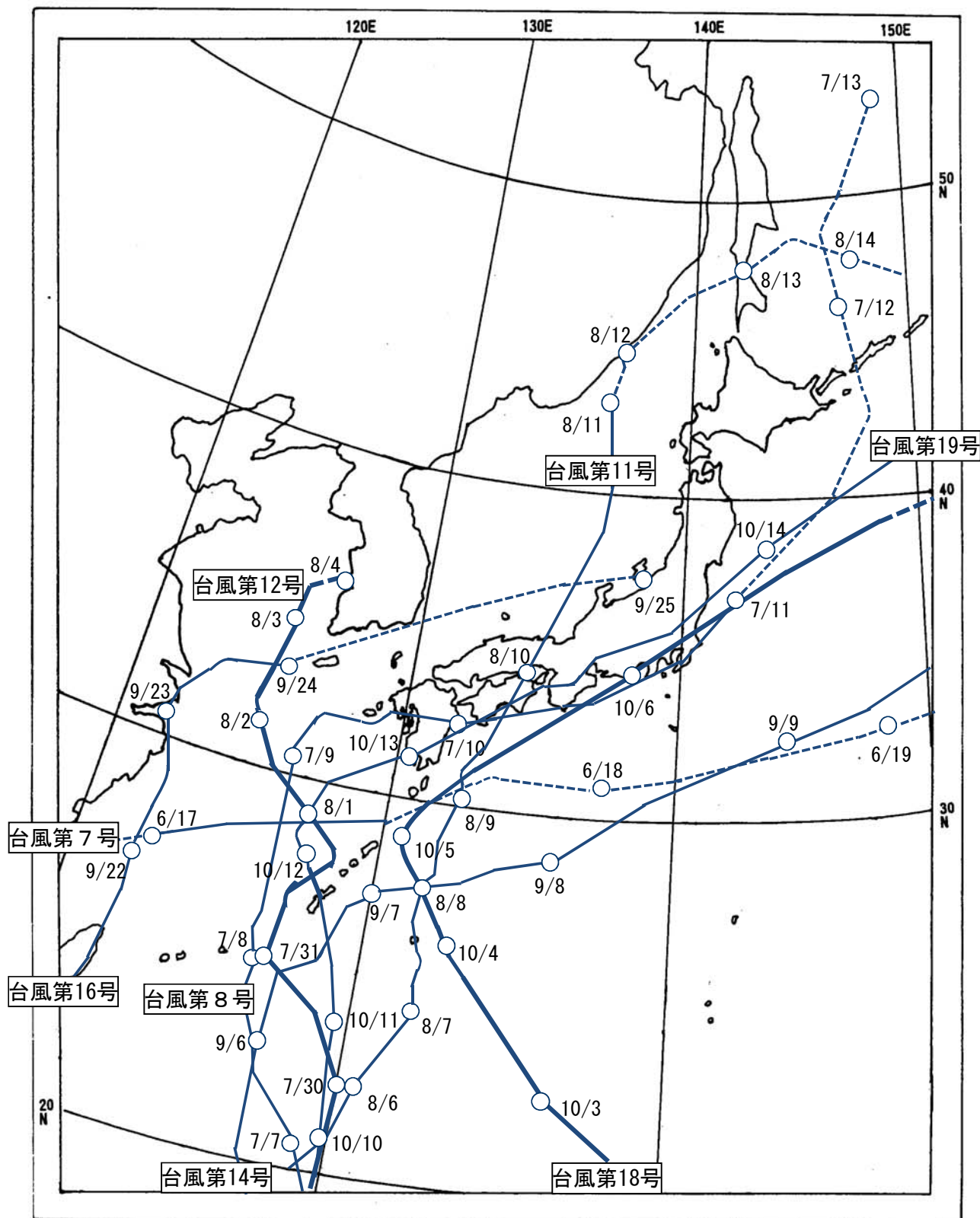
このほか、梅雨前線に伴う6月上旬の降雨により、麦類の穂発芽等が発生した。

なお、発生した主な被害は表2のとおりである。

表2 平成26年に発生した主要災害種類別被害概況（総数）

災害種類名	被害発生時期	被害面積	被害見込金額	主な被害農作物	主な被害地域
1月以降の降雪等	1月以降	ha 4,030	億円 198	野菜、その他農作物、果樹	群馬県、埼玉県、栃木県 等
梅雨前線	6月2日～8日	7,330	19	麦類、野菜、水陸稲	栃木県、茨城県、群馬県 等
台風第8号及び梅雨前線	7月8日～11日	28,700	15	工芸農作物、野菜、果樹	沖縄県、鹿児島県、山形県 等
台風第12号、第11号及び前線	8月1日～11日	35,000	34	野菜、水陸稲、工芸農作物	高知県、徳島県、新潟県 等
台風第18号	10月4日～6日	24,500	14	工芸農作物、野菜、雑穀・豆類	鹿児島県、茨城県、静岡県 等
台風第19号	10月11日～14日	34,600	21	工芸農作物、野菜、その他農作物	鹿児島県、沖縄県、宮崎県 等

(3) 平成26年に日本列島に上陸・接近した台風経路図



- 注 : 1 経路上の○印は傍らに示した日の午前9時の位置を示す。
 2 経路の実線は台風、破線は熱帯低気圧・温帯低気圧の期間を示す。
 3 気象庁資料から作成した。